

天明の大飢饉での救荒植物,
カナヅチとスズコ

公益財団法人
日本植物調節剤研究協会
技術顧問

森田 弘彦

日本雑草学会元会長の佐合隆一先生は、「人類が食糧飢饉に瀕するような事態に、食用にできる植物として古来伝えてきた『救荒植物』は、人類が残すべき植物としてリストアップしておく必要があると思います。」として、江戸時代から第二次世界大戦までの文献資料を用いて、「救荒雑草(2012)」を著された。おびただしい餓死者が出る悲惨な状況のもとで書き残された救荒植物についての記録は、後世への重い警告であるが、中には解説の難しい植物の地方名もある。江戸時代の三大飢饉に数えられる天明の大飢饉(1782～1788年)に際しての記録からいくつかの例を拾う。

「日本凶荒史考(西村真琴・吉川一郎編 1936(1983復刻))」の天明の項には50以上の文献資料が収録され、そのはじめに天明の飢饉の概略が[續日本王代一覽]から引かれた。

「天明二年、この歳春夏陰冷霖雨し諸國四分の減収を稱へ、西國特に南海九州等大いに凶荒す、東北諸國また違作たりしも米價高を好機とし餘儲あるものは之を西國に出せり、然るに翌三年春より陰濕多雨、暑氣至らず六月寒冷を催し京畿に於て猶冬服を着するの異例あり、また大いに風水して諸川氾濫し農稼を傷む、七月淺間山有史以來の大噴火あり、灰砂と泥流は信上武三州の田疇を害し、里落を漂蕩す、諸國の陰冷この後已むことなく、遂に早寒の襲ふ所となりて諸國大いに飢荒す、……天明二年より七年に亘る間、北は北海道より南琉球に至るまで諸國頻りに飢荒し、我國土殆ど完膚なかりしと云ふ、」

明治維新後にも続いた飢饉への警鐘を図で説いた「凶荒図録(小田切春江編・木村金秋画 1885)」には、天明の大飢饉

における「九州地方凶荒橋南谿翁話の圖(図-1)」や「奥州凶歳飢民出羽に流落する圖(図-2)」などがある。

「橋南谿翁話の圖」は、医者で文筆家の橋南谿(1753-1805)の紀行文集「西遊記続篇(1798)」に、「天明二年の飢饉の後年に、葛、金槌の根から採った粉を団子にして食ひ、その後は水仙に似たすみらの根を食べるという状況の中で、裕福そうな農家で休んだところ、その家では老婆一人を残して早朝から家人全員で山の奥へすみら掘りに行っている、と聞かされてその悲惨な様に胸を痛めた」とした記事に基づくもので、元の文章は以下のように簡略化された。

「天明四辰年四国九州の地飢饉にして人民の難澁いふ斗なし
其翌年になり穀物ハもとより琉球芋大根など喰ひつくし 葛
の根金槌スミラなどの根を堀り食せり 余一日行勞連て大なる
百姓の家に休ミたりしに老婆一人なり いかゞして人の少き
やと尋ねしに家内皆々今朝よりスミラ堀に參連りと 之をよく
よく尋ぬ連バ八里あまりの難澁なる山路を分入らざれば近き
あたりハ堀尽して一本もなし 故に朝七ツより起出で夜の四
ツ過ぎにあらされバ帰る事を得ず 如斯して採り歸るスミラハ
家内二日の食に足らづと 此家さへかくあ連バまして貧民の
老人小兒多き家ハ思ひやら連て胸ふさが連りと 橋南谿翁の續
西遊記に見えたり」

ここに記された救荒植物「葛の根 金槌 すみら」のうち、クズはよく知られた種、「スミラ」はクサスギカズラ科(旧のユリ科)のツルボ(*Scilla scilloides* Druce 図-3)で、「雑草のよもやま 第1回」で紹介した白井光太郎博士の論文「雑草」の末尾にも、雑草の例「綿



図-1 天明の大飢饉に際して橋南谿の西国での体験を描いた「九州地方凶荒橋南谿翁話の圖」(小田・木村「凶荒図録」1885より)



図-2 天明の大飢饉での北東北地方での流民を描いた「奥州凶歳飢民出羽に流落する圖」(同左)



図-3 橋南谿が「スミラ」の名で記録した救荒植物ツルボの春期の個体(左)と秋期の開花状態(右: 国立科学博物館 筑波実験植物園)



図-4 橘南谿が「金槌(カナツチ)」の名で記録した救荒植物「モミジカラスウリ」の葉と果実(益村聖氏原図)

棗兒(ツルボ)一名サンダイガサ)として上記の橘南谿の記事を付して解説された(本草学論攷(1935))。

「金槌(カナツチ)」については、熊本県にオオカラスウリ(*Trichosanthes laceribracteata* Hayata)とモミジカラスウリ(*T. multiloba* Miq. 図-4)に対して「カナツチ, カナツツ, カナツツ, カナツツゴリ, カナツチゴリ」などの地方名があり、「・モミジカラスウリとオオカラスウリは、同じ方言を使われる。・カナツチは、モミジカラスウリに使われる方言であるが地方によっては混同して使われている。」とある(乙益正隆「熊本県植物方言と民俗」1998)ので、これらの植物であろう。同書の「モミジカラスウリ」の項に以下の利用例がある。

「・根を集めて潰し、デンプンを取る。(八代)(球磨)・根を掘り上げて澱粉を取る。冬になるとカマス何表(原文のママ:俵)も取れた(球磨)五木村下梶原, 水上村, 山江村, 球磨村・根を掘ってゆがいてたべるとおいしい。(球磨)山江村・イノシシが好んで食べる。(八代)(球磨)・根を掘り上げ灰を入れて二〜三日炊く, これに味つけて食べた。(球磨)(芦北)」

モミジカラスウリに限らず、日本中に広く分布するキカラスウリを含めて、「コビ, コベ, コウベ」の地方名がある。宮崎県北西部の椎葉村で採集された植物民俗の中では、これらが食と毒に分けられている(齊藤政美「おばあさんの植物図鑑」1995)。

「・・・『実の卵形のもがホンコベで、これは食べられると。そしてピンポン球みたいに真ん丸の者がドクコベ。これは毒があって食べられんと』話を聞くうちにホンコベはキカラスウリで、ドクコベはモミジカラスウリだということがわかってきた。・・・」

地下部を救荒食に供されたモミジカラスウリの果実が椎葉村で有毒とされたのは少し意外に思うが、モミジカラスウリについては、1947年に宮崎県東臼杵郡で「根は大きく小さく大きく小さく長く続くのでつい穴が深くなって埋まって死ぬので二人でゆけとか、親の死目に会えないなどと云う。(内藤喬「鹿児島民俗植物記」1964 復刻1991)」、熊本県で「モミジカラスウリの根は、節の遠いものを選ぶ、下から八つでたのがうまい。地獄の見える位掘らねば出てこない。(乙益 前出)」や、和歌山県

東牟婁郡で「『ウルネ(瓜根)掘りは地獄の鬼の話し声がきぎとれるほどまで深く掘りさげねばならぬ』といわれる(小川由一「紀伊小口郷植物誌」1960)」と採録されたことから、この植物の根の採取に対する戒めが極まったことの影響かもしれない。

「カナツチ」や「コビ」のもとの意味は判然としないが、後者については、「古比:脚気など足の腫れる病気」の古語で根の形を表現したのかもしれない。いずれにしても、現代に残る地方名「カナツチ」の情報量からは、橘南谿が休憩を請うた農家の場所は福岡, 佐賀, 宮崎ではなく、熊本であったことが知られる。

「凶荒圖録」の「奥州凶歳飢民出羽に流落する圖」には、天明の大飢饉で津軽から秋田に流れた飢民の惨状が描かれた。50代前半でこの飢饉に遭遇した北秋田郡の長崎七左衛門は、「老農置土産並びに添日記」の「置みやげ添日記(1814)」に疲弊した人々の様を「・・・餓鬼道・・・修羅道・・・畜生道」と記し、同時に救荒植物も記録した(田口勝一郎「近世秋田の農書」1975)。

「糧品ハ顔レ露, 薊, 大葡萄の葉迄取奪しなり。山牛房の葉ハ豊年の時も取ヘキ品と見得し。・・・其外馬草に刈取し蓬ギ, すずこ, 藍の葉迄食せし也。言語同断の食物, 思ひ出すも身の毛のよたつし事ともなり。」

秋田県には植物の地方名に関する著作が多数あり、これらに依ると「フキ, アザミ」のほかの植物が「大葡萄:ヤマブドウ, 山牛房:ヤマボクチ, 藍の葉:イヌタデの類」であることがわかる。「蓬ギ」はヨモギ, オオヨモギなどいくつかの種であろう。「すずこ」は、鹿角地方での「シンチコ:・・・(子供の)男根をいう。この子のう穂の形は、それに似ているというのでいう。(松田孫治「秋田県産植物地方名考」1979)」と同じ系統の言葉とされる(米田博「かづの草木ことば集」1993)のでツクシである。

雑草の地方名を新規除草剤の適用性試験の成績書などに見出すと、地域での人と植物の関係が生きていることを知って、ほつとすることがある。

【熊本県から大分県にかけて2016年4月14日からの大きな地震で甚大な被害を受けた方々に心からお見舞いを申し上げます。天明の大飢饉で餓死者を出さなかった(「熊本市観光課史蹟の熊本」1956)という底力を発揮した熊本領内を含む地域であり、震災の被害から1日も早く復興されることを祈念します。また、福岡県の植物研究家、益村聖先生には「九州の花・実図譜」の新刊用に描かれたモミジカラスウリの精密画の使用をご承諾いただいたので、厚く御礼申し上げます。】